
ドラゴンクエスト? ~ 紡がれし三つの刻(とき) ~

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？〜紡がれし三つの刻とき〜

【Nコード】

N2139Y

【作者名】

乱

【あらすじ】

この物語は、メインキャラクターなどを他の作品のキャラクターに置き換えています。

主人公役の横島は転生者でも無く、世界移動した訳でも無く、横島というキャラクターを借りて来た訳です。他のキャラクター達も同様です。

キャラクターに合わせたギャグなどはしよっちゅう入る事がありますが話は基本的に原作に沿って進みます。

ちなみにサブタイトルの「三つの刻^{とき}」と言うのは、パパス・主人公・勇者の三世代と主人公の幼年期・青年期前半・青年期後半を掛け合わせたつもりです。

それぞれ、一話づつ完成してからアップしようとしてたけど少しづつでもなるべく毎日更新したいなと思ってこういう形にしました。

本作はT I N A M Iにも投稿しています。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その1（前書き）

横島を主人公に置き換えたDQ?。

そしてピアンカやフローラなども他のキャラに置き換えています。
パパスなど死んじゃうキャラなどはそのままだけど。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その1

カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、
コツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツ

その広い部屋には時計の音と、その背中に紋章が刻まれた赤いマントを着けた男がうるうる歩き回る靴の音だけが響いていた。

「パパス王、お気持ちは分かりますが少し落ち着かれてお座りになつてはいかがですか？」

大臣であろう一人の男が歩き回っている男に語りかける。

「う、うむ。…そうだな」

パパス王と呼ばれた男はそう言うと玉座に座るが、しばらくすると立ち上がり再びうるうる歩き回り出す。

そうしていると階段の方から誰かが駆けて来る足音が聞こえて来た。

「パ、パパス様!! お、お生まれになりました!!」

「何!? 本当か、バークよ!!」

「はい!! 早く王妃様の所に」

「う、うむ!!」

そしてパパスはすぐさま階段を駆け上がって行く。

「で、バーク。それでお子は？パパス王のお子は？」

「お喜び下さい大臣様。それはもう立派な……」

パパス王が息を切らせながら出産が終った部屋へと駆け付けると侍女が笑顔で待っていた。

「パパス様、おめでとございます！本当に可愛い、玉の様な男の子ですよ」

「そ、そうか!! 男の子か!!」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

生まれたばかりの赤ん坊は元気に泣いていて、母親はそんな我が子を愛おしそうに見つめている。

其処に満面の笑みを浮かべたパパスが歩いて来た。

「良く頑張ってくれたな、マーサよ」

「あなた……」

「おお、こんなに元気に泣いて……、

早速だが、この子に名前を付けてやらないとな」

「ええ、そうね」

パパスは顎に手をやり、唸りながら名前を考えている。

「うゝむ、うゝゝむ……、そうだ！！ 良い名が浮かんだぞ。トン

ヌラ、トンヌラと言つのはどうだ！？」

「……………トンヌラ？」

「どうだ、良い名だろう。はっはっはっはっ！！」

「まあ、ステキな名前！いさまして、かしこそうで……、でも私もこの子の名前を考えていたの。タダオと言つのはどうかしら？」

「そ、そうか……、あまりパツとしない名前だがお前が良いのなら良いと思うぞ」

そしてパパスは我が子を抱き抱えるとその名を呼んだ。

「神から授かった我等の子よ、今日からお前の名はタダオだ！！」

「元気に育つてね、タダオ」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

タダオと名付けられた赤ん坊は二人の腕の中で元気に産声を上げていた。

そして……

ザザーン、ザザーン、

波に揺られる船の中の一室で少年は目を覚ました。

「ん〜、むにゃむにゃ。父ちゃんおはよ」

「おお、起きたかタダオよ。…どうした？変な顔をして」

「何や変な夢を見たんや。ワイがどっかのお城で生まれる夢なんや」

「はっはっは、それはまた変な夢だな」

「そんでな、変なおっさんがワイにトンヌラっちゅーとんでもない名前を付けようとするんや。…って、どうしたんや父ちゃん？」

「へ、変なおっさん……、とんでもない名前……」 O T L

パパスは四つん這いになって何やら頂垂れていた。

「と、とりあえずこの船旅ももうじき終りだ。今の内に世話になった人達に挨拶をして来なさい」

「分かった。ほな、行って来るわ」

そう言うとタダオは元気に部屋を飛び出して行った。

そんな後ろ姿を見ながら……

「マーサよ、タダオもあんなに大きくなったぞ。早くお前にも会わせてやりたいな。……しかしタダオの奴、あの話し方がすっかり定着してしまったな。何が気に入ったんだか……」

旅の途中、しばらく滞在した村の独特の話し方だがタダオもようやく喋り出した所と言う事もあって、あの話し方で言葉を覚えてしまったのだった。

その格好は白い布の服の上に紫色のマント、頭には赤い布を覆い被せる様に巻いている。

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その1（後書き）

（、・・・）やはり子供時代の横島は関西弁の方が似合っているの
で無理やりだけど設定をねじ込みました。

ちなみにタダオが頭に巻いている赤い布は？の主人公を思い浮かべ
てくれると解りやすいです。

子供の頃はバンダナよりそうだった感じがいいと思ったもので。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その2

「お早うや、船長さん」

「おや、タダオくんじゃないか。お早う」

タダオが甲板に出ると船長は船縁から双眼鏡を使って海を監視していた。

「もうじきビスタの港に着く。そうしたらパパスさんやタダオくんともお別れだな、寂しくなるよ」

「そうやな、せっかく船のみんなとも仲良くなれたのに残念や」

寂しそうに俯くタダオの頭を船長は優しく撫でてやる。

「はっはっは、人の縁と言う物はそう容易く切れる物じゃない。何時かまた会えるさ」

「ん〜、むつかしゅうてよく分からんけどまた会えるんならその時が楽しみや」

「そうだな、大きく立派になったタダオくんと再会できるのを楽しみにしてるよ。……ほら、ビスタの港が見えてきた。お父さんと呼んで来なさい」

「うん、分かった」

笑顔で頷くとタダオはパパスを呼ぶ為に駆けて行く。

「……………、大きくなったタダオくんか。きつとその時にはタダオ様と呼ばなくてはならないんだろうな。ねえ、デュムパボス・エル・

ケル・グランバニア国王様」

そつと呟いたその言葉はタダオの耳には届く事無く波の音にかき消された。

「父ちゃん、港が見えて来たで」

「ようやく着いたか、村に帰るのも2年ぶりだな。タダオはまだ小さかったから良く覚えていないだろう」

「何となくなら覚えとるで」

「そうか、ならば早く帰ろう。バークが待ってるぞ」

「うん！」

棧橋の所に着くと船長達が誰かを出迎えをしている様だ。

「船長、誰か乗り込んでくるのか？」

「ああ、パパスさん。この船の持ち主のフォーベシイ様ですよ」

「そうか。ならば乗せてもらったお礼と挨拶をしなければならんな」

そして長い黒髪を靡かせながら一人の男が乗り込んで来た。

「フォーベシイ様、お待ちしておりました」
「ああ、出迎え御苦労さま船長。おや、その人達は？」
「私の古い知り合いで船の護衛代わりに同船していただいた…」
「パパスと申します。この度は貴方の船に乗せていただいて大変助かりました」
「いや、船を護つていただけたんならお互い様ですよ。有り難うございます」

そんな風に二人が握手をしていると紫色の長い髪の小さな女の子が船に乗り込もうとしていた。

「よいしょ、よいしょ」
「おや、ネリネちゃんにはこの入口は高すぎたかな？」

ネリネと呼ばれた女の子が棧橋から船に乗り込もうと四苦八苦している。

「ほれ」
「え？」

タダオはそんな女の子に手を差し伸べてやる。

「つかまりや」
「あ…は、はい／＼／」

女の子は赤くなりながらもその手を掴み、無事に船に乗り込んだ。

「タダオの奴め……」

「ははは、ネリネちゃん。ちゃんとお礼を言うんだよ」
「は、はい。あ、ありがとう…ございます／＼」

そんな時、もう一人の女の子が乗り込んで来た。

「ちょっとネリネ、それに其処の貧相な奴。さっさとどくワケ、おじさんも邪魔なワケ」

黒髪で色黒の女の子はそう言いながらズカズカと歩いて行くと部屋があるであろう扉の中に入って行く。

「これエミ、失礼じゃないか。すみません、礼儀のなってない娘で」

「いや、お気になさらずに。さあタダオ、我等も行くでしょう」

「分かったで父ちゃん、行こか…ん？」

タダオはパパスの後を追って船を降りようとしたがネリネはタダオの手を掴んだまま離そうとしなかった。

「どうしたんや？」

「あ、あの…、お、おなまえ…。わたし、ネリネ／＼」

ネリネはただどしくも、タダオに名前を聞く。

「そうか、自己紹介がまだやったな。ワイの名前はタダオや、よろしくなネリネちゃん」

「う、うん…。またね、タダオ…さま…／＼」

そこまで言うとネリネは顔を真っ赤に染めて逃げる様に走り去った。

「????父ちゃん、ネリネちゃんどうしたんや？」

「パパスさん……、貴方のお子様は……」

「言わないで下さい……。 (これで何本目の旗だ?) 」

やはり此処でも彼は鈍感であった。

「では世話になったな、船長。旅の無事を祈ってるぞ」

「ええ、パパスさん……、さんこそお元気で。タダオくん、元気でな。お父さんの様に立派で強い男になるんだぞ」

「うん、船長さんも元気でな。バイバイや」

そして、棧橋と船を繋いでいた橋は下ろされ、船はゆっくりと離れて行く。

タダオが名残惜しそうに船を見送っているとその後ろ側にあるベランダの様な所からネリネが顔を出し、手を振っていた。

少し寂しそうな顔をしながら……。

「またなー、ネリネちゃ〜ん」

タダオもそんなネリネの姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その2（後書き）

ネリネとタダオの話をもつと書き足すべきだったかな？

一応、ネリネの一目ぼれなんだけど…、まあ、ゲーム本編でもあんな感じだったし。

でも、もう少し考えてみるかな？

（、・・・）ちなみにアンディ役にはピートを用意しています（笑）
。つまり、三人目の嫁候補は別の人でしゅ。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その3 (前書き)

とりあえず、今回で一話目が完成。……はつくしよん！

風邪をひきました。

Level 1 「帰郷・パパスとタダオ」その3

「さて、行くとするか。今からなら夕暮れ時にはサンタローズに帰れるだろう」

「うん、はよ行こ。父ちゃん」

ビスタ港から飛び出したタダオはサンタローズへと続く道を元気に駆けだした。

『ピキーーーーッ!』

「わっ!」

サンタローズへと続く街道を駆けているタダオに、草むらの中から魔物が道を塞ぐかのように飛び出して来た。

「な、何や、スライムか」

タダオの目の前には三匹のスライムが並んでいて、その内の一匹がタダオを睨みつけたかと思うと行き成り飛びかかって来る。

「なんのっ!」

各地を旅して来たタダオは今までもモンスターとの戦闘経験はあり、スライム辺りが相手ならそれほど恐れる相手では無かった。

タダオは背中にしよっていたひのきの棒を掴むと一気にスライムに向けて振り下ろした。

『ピギャーッ！！』

タダオの一撃を受けたスライムは地面に落ちると弾け飛び、その場所には赤い宝石が残されていた。

魔王の邪悪な波動を受けたモンスター達はその影響を受けて魔力を結晶化させた宝石をその身に宿している。

倒されて命が尽きても宝石は消える事無くその場に残り、その宝石の価値はモンスターの強さに比例して強力なモンスターであればあるほどその純度を増し、より高額で取引される。

「うゝゝん、2G^{ゴールド}つてところやな」

宝石を日の光に翳しながら鑑定していると他のスライムを退治したパパスがやって来てタダオの頭を撫でる。

「中々見事な一撃だったな、これは将来が楽しみだ」

「へへへ、そやる？ほい、父ちゃん」

少し照れながらもタダオは手に入れた宝石をパパスに渡そうとするが彼はそれに手をかざして止めた。

「それはお前がスライムを倒して手に入れた物だ。お前が持っていないさ」

「ええんか？」

「ああ、無駄遣いはするんじゃないぞ。それに……」
「それに？」

パパスは厳しさと優しさの入り混じった目でタダオを見つめ、頭を撫でながら言葉を続ける。

「その宝石はお前が奪った命である事は忘れてはならん。たとえ相手がモンスターであろうともだ」

「……うん、モンスターだって生きてるんやもんな」

「分かっていればいいんだ」

宝石を袋にしまい込み、タダオとパパスは再び歩き出す。

それから何度かモンスタアの襲撃を受けるが左程大した相手でも無く、タダオも少し怪我をしたりしたがパパスのホイミによって瞬く間に治療される。

『ピキーーーーッ！』

そして何度目かの闘いの時、タダオは襲い掛かって来たスライムをひのきの棒で撃退する。

『ピキヤッ！』

その攻撃は「会心の一撃」と言うべき威力だったが、不思議な事にスライムは何時もの様に弾け飛ぶ事無く、地面に転がり目を回していた。

「ピキヤ〜〜ア……」

「あれ？父ちゃん、なんでコイツは宝石にならんのや？」

「こ、これは……、まさか」

タダオは不思議がり、パパスが呆然としてしているとスライムは徐に起き上がり、タダオを潤んだ目で見上げている。

「ピイ、ピイ」

「何やコイツ、何か言いたいんか？」

「……きつと、友達になりたいんだろっ」

「ともだち？ワイはコイツをたおそうとしたんやで？」

「きつとタダオに倒された事で悪い心が無くなったんだろっ」

そう言って来るパパスからスライムに目を移すとタダオは笑いながら話しかける。

「じゃあ、ワイといっしょに来るか？」

「ピイーーー、ピッピイーーー」

スライムはそう誘ってくれたタダオに飛び付くと、喜びながら頭の

上に登り甘える様に体を揺らしている。

「（やはりマーサの子供だな。タダオにも同じ力が宿っていたか）
じゃあ名前を付けてやらねばな。トンヌ……」

「ピエールや！　お前の名前はピエールやで。……父ちゃん、な
にか言ったか？」

「いや……、何でもない……」

パパスはそう言いながら歩き出したがその背中には何処となく哀愁
が漂っていた。

そんなパパスを見つめるピエールは安堵の表情をしていたとか。

そして空が茜色に染まり始めた夕暮れ時、二人と一匹は遂にサンタ
ローズへと辿り着いたのだった。

＝ 冒険の書に記録します ＝

《次回予告》

旅を終えてサンタローズに帰って来たワイと父ちゃん。
そこで昔、よく遊んでもらったレイコ姉ちゃんと再会した。
でも、レイコ姉ちゃんの父ちゃんは病気みたいなんや。
レイコ姉ちゃんの父ちゃんの薬を作る為に薬師のおっちゃんを捜し
て洞窟を探検や。

次回Level2「洞窟の中には」

さあ、ドラクエするで!!

Level 1「帰郷・パパスとタダオ」その3（後書き）

と、言う訳でスタートした多重クロスキャラによるドラクエ？ストーリー。

何故、タダオが主人公なのにパパス役がタイジュじゃないのか？それは物語の上でどうしてもパパスの死が免れない為です。

最初はギャグメインで行こうと思ってそれも有りかなと思ってたんですがプロットを立てて行くと結構シリアスな話になって行って、やはり死ぬ役に他のキャラクターを持って来るのは不謹慎かなと言う事で原作通りに父親はパパスのままで行こうとした次第です。

仲間一号のスライムが「スラリン」じゃなく「ピエール」なのはスライムからナイトへの進化フラグだったりする。

敵モンスターの時は『』ですが、味方モンスターになつてからは「」と括弧を変えています。

ピエールの声はゴメちゃん風と置いていただければ丁度いいかと。

そしてパパスさんは未だに諦め切れてない様です。

倒されたモンスターがGゴルドではなく宝石を落とすのはアニメドラクエの「アベル伝説」から持って来た設定です。

ちなみに次回予告で解る様にイメージED曲は「夢を信じて」です。

絵が描ければイメージ画を描くんだけどな。

誰かいないかな〜。

ー ・ ・ チラリ

「取扱説明書」(前書き)

少しでも解りやすくなればと書いてみました。

「取扱説明書」

まずは、この物語の世界観から。

・原作にない村や町などが出てきたりしますが基本的には？の世界。
？の町や国が出て来る事は無い。

・主人公はタダオ。（GS美神・横島忠夫）本名タダリユーオム・
エル・ケル・グランバニア

ピアノカ役はレイコ（GS美神・美神令子）

フローラ役はネリネ（SHUFFLE!・ネリネ）

デボラ役はエミ（GS美神・小笠原エミ）

アンデイ役はピート（GS美神・ピート）（オチは分かりますね）

サンチョ役はバーク（Tick!Tack!・バーク）

その他、色んな作品からもキャラクターが出て来ますがそれが誰かは物語が進んだ先で。

・基本、話は元ゲーのドラクエ？に沿って進みますが当然原作に無い展開もあります。

（タダオが無自覚の内にあちらこちらで旗を立てまくっているなど）

・パパス、マーサ、ダンカンなど、キャラクターを入れ替えていないキャラなども多数出て来ます。

パパス役を大樹にしようかとも思いましたが、ストーリー上どうしても死亡フラグは消せないなのであえてパパスのままです。

モンスターを倒した時に得られるG（ユールクド）について。

・最初は倒したモンスターを素材として売り払いGを得るという事

にしようかと思いましたがそれは既にやってる方が居るのでボツ。

・モンスターが冒険者や旅人を襲った際に習性で光り物（G）を盗っていき、それを倒した際に再度手に入れるという方法もありますが、これも既にやってる方が居ると言う事でこれもボツ。

・そこで思い出したのがアニメ版ドラクエ「アベル伝説」の宝石モンスター。

・魔王の魔力によって凶暴化したモンスターの内部で魔力が結晶化、宝石になる。

その宝石がモンスターを倒した際にGゴールドの代わりに報酬になる。

・つまり、タダオが仲間に来るのは体内で魔王の魔力が結晶化していないモンスターと言う事。

・タダオが倒す事によってモンスターの体内の魔力は浄化されて結晶化、それが仲間になるモンスター。

・モンスターはドラクエ？には出て来ないモンスターや原作では仲間に来ないけどこの話では仲間に来るモンスターなどが出てきたりします。

その他の設定はまた後ほど。

Level 2 「洞窟の中には」 その1

「サンタローズ」

船旅を終え、街道を歩くパパスとタダオ、そしてタダオの肩に乗っているピエール。

そんな二人と一匹の前に目的地であるサンタローズの村が見えて来た。

「やっと帰って来たんやな父ちゃん！」

「そうだな、タダオ」

村の入り口には見張りの村人が立っていて、二人を見つけると警戒するがそれがパパスだと気付くと満面の笑みで二人を迎える。

「パパスさん、パパスさんじゃないですか！帰って来たんですね！」

「おお、エーじゃないか、長い間留守にしたな。これから暫くはこの村に腰を落ち着けるつもりだ」

「それは皆が喜びますよ。……それはそうと、その子の肩に乗っているのは…スライム!？」

門番のエーはタダオの肩の上のピエールを見るや否や、槍を向けようとするがパパスは笑みを浮かべながらそれを手で制す。

「心配は要らぬぞ。このスライムは邪気を祓われている、もはや悪さはしない」

「そつやで、ピエールはワイのともだちや!!」

「ピッピイー」

「君は…タダオくんか。大きくなったな、パパスさんやタダオくんが大丈夫と言うのなら心配はいらないな。じゃあパパスさんが帰って来た事を皆に報告しなきゃ」

そう言うとエーは村へと駆け出し、喜び勇んで村中にパパスが帰って来た事を叫んで回った。

「おおーっ！っ！っ！　パパスさん達が帰って来たぞおーっ！っ！っ！」

「お帰り、パパスさん」

「やあ、良く帰って来たな！今夜は一杯飲みながら旅の話をお聞かせしてくれ」

「わあーっ！っ！　パパスさんが帰って来たあーっ！」

村人達は皆笑顔で二人を迎え、家が見えて来ると玄関の前に召使いのバークが待っていた。

彼の服装は他の村人達とは違い黒を基調とした、いわゆる執事服である。

バークはタダオ達を見つけると勢いよく走りだした。

「坊っちゃんーっ！っ！　坊っちゃん、坊っちゃんではないですか!!」

「た、ただいまや、バーク」

バークはタダオに駆け寄ると抱き抱え頬擦りをする。

一見するとかかなり危ない光景ではあるが彼のパパスへの忠誠心は偽りなく、彼から寄せられる信頼度も高い為パパスもそれを笑いながら眺めている。

もしこれが、他の男であったならすぐさま切り捨てられていただろう。

「はははは、大きくなれましたな」

「うん。ワイ、大きくなつたやろ」

「留守の間ご苦労だったな、バーク」

「パパス様、このバーク、タダオ様とパパス様のお帰りを一日千秋の想いでお待ちしていました」

「うむ、心配をかけて悪かつたな」

「さあ、家の中へ」

そしてパパスとタダオは懐かしの我が家へと入って行った。

「お久しぶりです、パパスおじ様」

そう言いながら二階から降りて来たのは栗色の髪を両側で結んだタダオよりも少し年上の女の子だった。

「おや、君は？」

「私の娘だよ」

「ママア、久しぶりだな。するとこの子はダンカンの娘のレイコか」
「ああ、タダオも大きくなったね。二年ぶりだから当たり前といえは当たり前前だけどね」

「タダオ、私の事覚えてる？」

「え〜と。……あつ、レイコや!」

「…2才年上のお姉さん呼び捨てにするのはこの口かしら？」

そう言いながらレイコはタダオの口を掴み、思いっきり両側に引っ張る。

「いひゃい、いひゃい、ほめんなはい、れひほおねへひゃん!」

「解ればいいのよ」

「はははははは」

大人達はそんな子供達を微笑ましそうに笑っていた。

「ねえ、タダオ。おじ様達は大人の話があるだろうから私達は二人で遊ばない？」

「うん、遊ぼ」

レイコとタダオはそう言いながら二階へと上がって行った。

「それでママアよ、何の用事なのだ？私達が帰って来る事を知って

いた訳ではあるまいに」

「ああ、ウチのダンナが病気になってね、薬を調合してもらいに来たんだけど肝心の薬師のビーが洞窟に材料の薬草を取りに行ったまま戻って来ないんだよ」

「うゝゝむ、そうか。私もあの洞窟には用事がある。ついでと言つては不謹慎かもしれないが探してみよう」

「頼んだよパパスさん」

Level 2「洞窟の中には」その1（後書き）

（、・・・）ルドマン役がフォーベシイなのにサンチヨ役がバークなのは、ちょっと違和感。しかし、闘う召使い（執事）を誰にするかと悩んでいるとあの雄叫びが脳の中を駆け巡ったのです。『坊っちゃんまー！！』と。

Level 2 「洞窟の中には」 その2

「ところでタダオ、そのスライムはどうしたの？」

「帰ってくる途中で友だちになったんや、名前はピエール。ピエール、この女の子はレイコ、ワイの姉ちゃんみたいなのや」

「ピイ、ピッピイ」

「魔物と友だちになるなんて、アンタはホントふしぎな子ね。まあいいわ、私はレイコ、よろしくねピエール」

「ピイー」

笑いながらピエールの頭を撫でてやるとピエールは嬉しそうに鳴きながらレイコの手で頭を擦りつける。

「あいさつは終わりやな。じゃあ、何して遊ぶ？レイコお姉ちゃん」

「そうね、なら本を読んであげるわ。この本なんか良さそうね」

レイコは本棚から一冊取り出してペラペラとめくるとそのまま本棚に戻し絵本を取り出す。

「やっぱりタダオには絵本の方がいいわよね」

「読めへんのなら素直にそう言えば……」パコーンッ！

「良く聞こえなかったけど何か言ったかしら？」

「……何も言ってますん……」

「ピイ〜」

タダオは涙を滲ませ、叩かれた頭を擦りながらレイコと絵本を読んでいく。

ピエールは何やら怯えてる様だ。

《ヤマグチ⇨セマシ冒険隊》

冒険家、ヤマグチ⇨セマシが世界中の洞窟や未開の地を冒険して回るといふ話の絵本である。

レイコが机の上に絵本を広げて読み、タダオとピエールはその横から覗き込んでいた。

「『まつくらやみだ、これはなにがおこるかわからないぞ』ヤマグチ⇨セマシはいま、だれもはいつたことのないどうくつにはいるうとしてる」

「なあ、レイコお姉ちゃん」

「どうしたのよタダオ？」

「この絵なんやけど、誰も入った事の無い洞窟やのに何で入って来るカワグチを洞窟の“内側”から描いとるんやろ？」

「……さあ？…、続きを読むわよ。どうくつにはいつたカワグチのあしもとにはひとのあたまのほねが……」

「えらいピカピカできれいな骨や…」スコーーッ！

レイコのこっげき。

タダオに25のダメージ。

ピエールは逃げ出した。

「……黙って聞いてるって事が出来ないの？」

「……カドは反則や……」

「ピキィ〜〜〜〜」

「レイコー、そろそろ宿に帰りますよ」

「はい、ママ。じゃあタダオ、またね」

「うん、レイコお姉ちゃん」

レイコ達は宿へと戻り、タダオは一階へと下りて行く。

「さあ、坊っちゃん。今日はこのバークが腕によりをかけて御馳走を作りますからね」

「わーい、楽しみやー！！」

その日の夕食は思った以上に豪勢で、タダオは久しぶりに腹一杯の食事に満足したようですぐに眠りこんでしまった。

翌日

「ふあぁ〜〜〜〜、おはようございませ

「お早うございます、坊っちゃん。朝食の用意は出来てますよ」
「さあ、早く顔と手を洗って来なさい」
「は〜い」

タダオがまだ食べている時、いち早く食事を済ませたパパスは立ち上がるとタダオに話しかける。

「タダオよ、私はこれから用事があるので出かけるが決して一人で村の外へは出てはいかんぞ」
「わかったで、いつてらっしやいや父ちゃん」

食事を続けるタダオをバークは懐かしそうに見ながら呟く。

「本当に坊っちゃんはだんだんとお母上に似て来ましたなあ。お母上のマーサ様もお優しい方でモンスターさえもマーサ様の前では子猫の様に大人しくなったものです。ちょうどこのピエールの様に」
「ピイ？」

「そうなんか？」
「ええ、本当ですとも。（あんな事さえなければ今頃タダオ様もお城で何不自由無く、幸せに暮らしていたものを……）」

「しちそうさまや！遊びに行ってくるな。ピエール、行くで」

「ピッ、プイー」

昔の事を思い出し、暗い表情になっていたバークだが元気に駆け出す。タダオを穏やかな顔で見送る。

「気を付けて下さいね、危ない事はなさない様に」
「わかつとるって！」

Level 2 「洞窟の中には」その2（後書き）

（、・・・）川口浩探検隊。幼い頃彼等は私のヒーローでした。本気で信じていた純粋なあの頃にはもう戻れない。

Level 2 「洞窟の中には」 その3

村の中を歩くタダオだが、もう春も間近だというのに肌寒さに震えていた。

畑にも作物は実らず、焚き火で暖を取っている村人も居る。

「うう、寒い寒い。どうしたっていうんだろうね今年は？」

「皆も寒そうやな。早う春が来ればええのにな」

「ピイ、ピイ」

そして、宿屋に着くとタダオは二階に上がりレイコ達が泊っている部屋へと入って行く。

「レイコ姉ちゃん、おはようや」

「おや、坊やはパパスさん所のタダオ君だね」

「うん、レイコ姉ちゃんは？」

「折角遊びに来てくれて悪いんだけどね、レイコはまだ寝てるんだ
よ」

「まだ？ずいぶんとおねぼうさんやな」

そう言いながらベットで寝ているレイコを覗き込むが、ママヤは寝ているレイコの髪を優しく掻き分けながらタダオに言う。

「この子は病気の父親が心配でね、昨夜も中々寝付けなかったみたいなんだよ」

「そっかー。ゴメンな、わるいこと言ってもうたわ」

「ははは、いいんだよ。だからもう少しレイコを寝かしてやってね」
「うん。じゃあ、また後でな」

そう言いながら部屋を出て、扉を閉めようとするときママの咳き音がタダオの耳に聞こえて来た。

「はあく、パパスさんも忙しそうだしね。誰か捜しに行ってくれたらねえ」

宿屋を出て、少し歩いた所でタダオは足を止めるとピエールは不思議そうにタダオを見上げる。

「ピエー？」

「よっしゃー！ピエール、ワイらで薬師のおっちゃんをさがしに行くんや。そうすればレイコ姉ちゃんやおばちゃんもよろこぶで」

「ピイ、ピイピイ」

そして、いざ洞窟に乗り込もうとするのだが流石に武器がひのきの棒では心許無い。

そこで武器屋で新しい武器を買おうとしたら店の親父は。

「ほう、ビーの奴を捜しに行くのか。だったら特別サービスだ、今あるGコールドにひのきの棒を買い取った分を足して銅の剣を売ってやろう。それでもGコールドは足りないんだけどな、坊やの勇氣に免じてだからな。他の皆には内緒だぞ」

と、銅の剣を売ってくれた。

「ありがと、おっちゃん。がんばってくるぞ！」

タダオはそう言つと買ったばかりの銅の剣を腰布に挿し、喜び勇んで駆けて行った。

「ははは、冒険ゴツコか。俺も小さい頃はよくやったものだ」

何と言う事でしょう。この男はタダオが本当に洞窟に入るとは思つてなかつた様です。

くサンタローズの洞窟く

洞窟に入ると流石に薄暗くなって来て、ピエールと一緒にとは言え不安に駆られて来る様だ。

なのでタダオは歌を歌いながら先に進む事にした。

歌うのはあの絵本が題材になった歌で、あのツツコミ所満載の絵本は小さな子供には結構人気があり、そのツツコミ所をツツコミまわったこの歌は子供達の間で流行っていた。

ガイドラインの問題で掲載できないのが残念だ。

「くさそりばちの次はどくいも……」

歌を歌っているタダオの前の方から何やら物音が聞こえて来た。

そして、暗闇の中から出て来たのはスライムとおおきづちの二匹だった。

「ピエール、あいては同じスライムやけどたたかえるか？」

「ピイッ！ピッピイー！」

ピエールは任せろと言う様に身構えている。

おおきづちは初めて見るモンスターだが、パパスからその特徴などは聞いているので驚く様な事は無かった。

だが、ピエールとは違うその赤く濁った瞳を見ると何処となく寂し

くなるタダオであった。

L e c c e 1 2 「洞窟の中には」その3（後書き）

（、・・・）タダオが歌っているあの歌、小説版から持って来たネ
タでしゅ。

Level 2 「洞窟の中には」 その4

「本当ならともだちになれるかも知れんのやけど、かかって来るならワイもてかげんでけへんで」

『ピキィ〜、ピキヤーーツー!!』

「ピイ、ピキーイー!!」

『ピキツ……ピギヤアツ』

スライムはピエールに襲い掛かるがピエールはその突進を軽くかわし、逆に体当たりをかける。

ピエールの体当たりをまともに受けたスライムはそのまま壁にぶち当たり弾け飛んだ。

『フガーーー!!』

「こんのおーーーっ!!」

タダオの頭ほどの大きさの木づちを振り上げながら突進してくるおきづちにタダオは慌てる事無く振り下ろして来る木づちをかわし、銅の剣を振り抜いた。

『フギヤーーーー!!』

おおきづちは悲鳴を上げながら真つ二つになり、地面に落ちると溶ける様に消えて行き、後に残ったのは宝石だけだった。

その宝石を拾い上げるタダオの所にピエールがスライムの宝石を啜えてやって来た。

「じくろつさんや、ピエール」

「ピィ、ピィ」

ピエールから宝石を受け取るとタダオはピエールの頭を優しく撫でてやると、それが気持ちいいのか体を揺らしながら喜んでいる。

そしてタダオは手の中にある宝石を見つめると寂しそうに呟いた。

「ワイがうばった命か……」

「ピィ？」

「なんでもないんや」

宝石を袋の中にしまい込むとタダオは再び歩き出した。

そして次々と襲い掛かってくるモンスター達。

蝙蝠の様な姿をした「ドラキー」、丸い体に何本ものとげを生やした「とげぼうず」、大きめの体で頭に鋭い角を生やした「いっかくウサギ」、突然足元の地面から攻撃して来る「せみもぐら」。

此処まで襲って来たモンスターに共通するのはその瞳が赤く濁っている事、思い返せばピエールが襲って来た時は目つきは鋭かったものの、瞳は濁って無かったように思い出すタダオだった。

奥へと進み、地下に続く階段を下りると岩が崩れている所が見えた。近づいてみて見ると更に下の階に岩が落ちている様だ。

「あぶないなー。ワイらも気をつけんといかな、ピエール」
「ピイ、ピイ」

更に奥へと進み、何度目かの戦闘の際にピエールが傷を受けてしまった。

「だ、だいじょうぶか、ピエール？」
「ピ…ピイ〜」

ピエールはタダオに心配をかけまいと平気そうな振りをするが、それがやせ我慢だと言う事は誰が見ても分かる事であった。

「こんな時、父ちゃんやったら“ホイミ”でピエールを治せるのに……、あれ？」

タダオが“ホイミ”と口にした際、手から何か温かな力を感じ、自分の体の傷が癒えている事に気付いた。それはパパスにホイミをかけてもらった時と同じ暖かさだった。

「ひよっとして……、「ホイミ」」
「ピ？…ピイ〜〜」

ピエールに手をかざしてホイミと唱えると、タダオの手から光が零れてその光はピエールの体の傷を癒して行く。

「ホ、ホイミや！ピエール、ワイにもホイミが出来たで！」
「ピイ、ピイ〜」

カサリ

そうやって喜んでいると、後ろの方から物音が聞こえて来た。神経が過敏になっているタダオはすぐに振り返り、銅の剣を構えながら叫んだ。

「モ、モンスターか！？ かって来るならかって来んかーいっ
！！」

「ピキ〜イッ！〜！」

振り向いた先には一匹のスライムが居り、怯えながら叫んで来た。

「まつ、待つてよ！虐めないでよ、僕は悪いスライムじゃないよー
ー!!!」

「ス、スライムがしゃべった？」
「パイ？」

スライムが喋った事に驚くタダオだが、すぐに構えていた銅の剣を下ろすと鞘の中へと戻した。

スライムはその行動に驚きながらも少しづつタダオへと近づいて行く。

「僕の事、悪いスライムじゃないって信じてくれるの？」

「おう、お前の目はピエールみたいにキレイやからな。悪いモンスターならもつといやな色をしてるぞ」

「パイ、パイ」

タダオがスライムの問いに答えると、ピエールもまた「その通り」と言わんばかりに頷いている。

「へえ〜、君の名前はピエールって言うのか」

「パイ、パイパイ。パイ〜〜?」
「うん、とてもいい名前だね。僕?僕の名前はね…」
「お前、ピエールと話せるんか?」
「そりゃ、僕もピエールも同じスライムだもん」
「あ、そついやそつやつたな。わはははは」
「パイ〜〜…」

照れくさそうに頭を掻きながら笑うタダオをピエールは呆れた様に見つめ、スライムはそんな二人を不思議そうに眺めながら語りかける。

「君は人間なのに何でモンスターのピエールと仲良くしてるの?ピエールって名前も君が付けてくれたってピエールが言ってるし」
「何でって、ともだちと仲ようするのは当たり前やろ?」
「友だち……」

自分と同じスライムを当たり前の様に友だちと言うタダオをスライムは少し眩しそうに見つめる。

「パイ、パイパイ」
「そうだね、忘れていた。僕の名前はスラリン、よろしくねピエール。そして…」

スラリンは自己紹介をすると少し不安そうにタダオに目を向ける、
する。

「ワイか？ワイの名前はタダオヤ。仲よろしような、スラリン」

「ピイツ、ピイツ」

「あ……う、うんっ！」

暗い洞窟の中で一人ぼっちだったスラリン、人見知りで寂しがり屋だった彼に初めて友だちと言う光が射した瞬間だった。

くスラリンが仲間になったく

Level 2「洞窟の中には」その4（後書き）

（ ）と、言う訳で洞窟の中に居たあのスライムがスラリンとして仲間になりました。

Level 2「洞窟の中には」「その5（前書き）」

二話目は今回で完成です。

Level 2 「洞窟の中には」その5

洞窟の中ではスラリンが先頭になって道を案内している。

流石に洞窟の中を住処にしていただけはあつて魔物の少ない所を選んで進んでいる。

「ところでタダオ」

「ん、何やスラリン？」

「タダオはどうやってピエールを仲間にしたか覚えてる？」

「ん、どうやったかな？いつもはたおした後はじけ飛んでたんやけど、ピエールはすぐに起きあがって来たんや。父ちゃんに聞いたらともだちになりたがってるって言うからともだちになったんや。

な、ピエール」

「ピイ、ピイ」

「そうか、だったらピエールは“染まりきってなかった”んだね」

「…そまりきる？」

「うん。襲つて来る魔物を倒した後、宝石が残るだろ？」

「……ああ……」

タダオはそう答えながら袋の中から宝石を取り出す。

「それは僕達の体の中にある魔力が魔王の悪い波動で魂ごと結晶になったものなんだ。魔王の波動に“染まりきつてしまえば”もう元のふつ々の魔物には戻れないんだ。ピエールはまだ“染まりきる”前だったから元の魔物に戻る事が出来たんだよ」

「そうなんや、良かったなピエール」

「ピエー—」

(それでも本当ならこんなに仲良くなれる筈は無いんだけど)

そんな風に話をしながら進んでいると、地下に続く階段がありタダ才達は地下に降りると何処からかうめき声が聞こえて来たのでタダ才達はすぐに駆け寄って行く。

其処に居たのは一人の男で上の階から落ちて来たであろう岩に足を挟まれていた。

「うう〜、だ、誰か〜。誰か助け…」

「ピィピィ」

「うわぁー！ーっ！！ ま、魔物…もうダメだぁ〜っ！！」

「おちつきや、おっちゃん」

「わぁぁ〜…、へ？」

近づいて来たピエールに慌てふためく薬師だが、続いて聞こえて来たタダ才の声に幾分落ち着いた様だ。

「こ、子供？何で子供がこんな所に？」

「おっちゃんは薬師のおっちゃんか？」

「あ、ああ、そうだが」

「よかった、さがしてたんやで。レイコ姉ちゃんの母ちゃんが薬が来るのをまつとるんや、はやく帰ろうや」

「そ、そうか。ならこの岩をどかしてくれないか、身動きが取れないんだ」

「わかったで、ピエールとスラリン手伝^{てつてん}つてや」

「ピイッ」

「分かったよ、タダオ」

タダオとピエール達は岩を力一杯に押しで行くと、岩はゆっくりと動き出し薬師のビーはようやく解放された。

「そうか、君はパパスさんの息子のタダオくんか。しかしその魔物達は一体……」

「ピエールとスラリンはワイのともだちや。悪い魔物やないで」

「ピイ……」

「友だち……、嬉しいな」

岩の下から解放された薬師のビーはタダオのホイミで傷を癒してもらい、皆で話をしながら洞窟から出る為に歩いている。

歩いて行く先には光が射して来てようやく洞窟から抜け出した。

「さて、早速ダンカンさんの薬を作らなくてはな。タダオくん、ありがとうな」

「どういたしましてや。はやく作ってやってな」
「ああ、任せておきなさい」

ビーは笑いながら親指を立て、仕事場へと走って行った。

「さて、ワイらも帰ろ。スラリンのことも父ちゃんとバークに紹介しなきゃいかんしな」

「本当にいいのかな？」

「ええにきまつとるやる。ワイらはもう、ともだちなんやで」

「ピューー」

「うん、ありがとうタダオ」

そして、タダオ達も家へと帰って行く。

翌日。

ビーが慌てず急いで正確に頑張った為、薬は明け方には完成し、ミヤとレイコはさっそく薬を持ってアルカパへと帰る事になった。

「女二人だけでは何かと危険だからな、私が護衛して行くでしょう。タダオよ、お前も来るか？」

「うん、もちろんワイも行くで」

「ピイッ」

「僕はまだ外の人間が怖いから留守番してるよ」

ピエールはもちろん自分もついて行くと張り切り、スラリンはまだ外が怖いと留守番しようとする。
そんな二人にパパスは。

「ピエールには悪いがお前も留守番だ」

「ピイー？」

「なんでや、父ちゃん？」

「アルカパはこの村より幾分大きな町だからな。そんな所にピエールを連れて行くと騒ぎになりかねん」

「ピエールは悪い魔物やないで！」

「それはよく分かってる。だが、人は魔物というだけで怖がるのだ。それにダンカンの家は宿屋だからな、悪い噂が立つと客が泊らなくなるやもしれん」

「ごめんね、タダオくん」

「ううん、いいんや。というわけでピエールもるすばんや」

「ピイ〜」

「坊っちゃん、パパス様、お気をつけて行って来て下さい」

「ピイ〜」

「気をつけてね、タダオ」

バークにピエール、スラリンの見送りを受けてパパスとタダオ、そしてマミヤにレイコはアルカパへと歩いて行く。

「ところでタダオ？」

「なんや、レイコ姉ちゃん」

「その頭のタンコブどうしたの？」

「……お尻ペンペンとゲンコツ、どっちがいいかって父ちゃんに言われたからな。……、さすがにもうこの年でお尻ペンペンはかんべんや」

「冒険の書に記録します」

《次回予告》

何とか薬師のおっちゃんを見つけて薬が出来上がったで。

父ちゃんにゲンコツもろたけどな……。

アルカパに帰るレイコ姉ちゃん達にワイもお伴でついて行ったんや。でも、そこで……アイツら何ちゅーことをするんや！

オバケ退治？やったるーやないかい！！

次回Level3「オバケ退治にレヌール城へ」

ワイの苦手は…父ちゃんのゲンコツや……

Level 2「洞窟の中には」その5（後書き）

（、・・・）タダオのセリフでひらがな表記が多いのはまだ6才だからそれっぽさを出そうとしてるからです。

（　　）さて、次回はいよいよアルカパへと舞台を移します。そして当然、あのイベントには彼女が登場します！！お楽しみに。

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その1（前書き）

少し思う所があつて、タイトル変更。

……やっぱり、「オバケクエスト」は無いだらう。

注・レイコがレヌール城のオバケの事を説明してる所に修正を加えました。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」その1

「アルカパ」

サンタローズから半日ほど歩いた所にアルカパの町はあった。元々、アルカパとサンタローズは「レヌール」という小国に属していたがレヌール王家は後継者を得る事が出来ずに断絶、王家は滅びレヌール城も今は廃城となり訪れる者は無いと言つ。

それにより、現在アルカパとサンタローズは大国「ラインハット」に併合されている。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」

「ただいまー、やっと帰って来たわ」

レイコは元気に叫びながらアルカパの町の門を駆け抜け、門番をしている男はそんなレイコに笑顔で話しかける。

「お帰り、レイコちゃん。薬は手に入ったかい？」

「ええ、これでパパもすぐに元気になるわ」

「それは良かった。さあ、早く薬を持って行ってあげ」

「うん、じゃーねー」

レイコは家でもあるこの町一番の宿屋へと駆けて行き、マミヤとパスにタダオも漸くアルカパに辿り着いた。

「全く、レイコったら。少し急ぎ過ぎよ」

「はははは、いいじゃないか。それだけダンカンの事が心配だったんだろう」

「お帰り、マミヤさん。それにアンタは…パスさんじゃないか。久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。シーよ」

「父ちゃーん、早はやうしてや」

何時の間にか先に進んでいたタダオが飛び跳ねながらパスを急かしている。

そんなタダオにパスは微笑ましそうに笑いながら答えてやる。

「分かった分かった、そう急かすな。ではな、シー」

門番をしているシーに挨拶を済ませるとパスとタダオはマミヤに連れられて宿屋へと入って行き、ダンカンが寝ている寝室に案内される。

「ダンカン、久しいな。具合はどうだ？」

「おお、パパスじゃないか。何時帰って来たんだ？ゴホゴホッ」

「起きずともよい。マミヤ、早くダンカンに薬を」

「ありがとうパパスさん。さあアンタ、薬だよ」

ダンカンは薬を飲ませてもらうと楽になったのか、顔色も若干良くなってきた。

「もう大丈夫だろう。タダオ、私達は少し話があるからお前は町でも歩いて来なさい。レイコちゃん、タダオの案内をたのめるかい？」

「ええ、任せておじ様。行こう、タダオ」

「うん。たのむでレイコ姉ちゃん」

そうして二人は町へと出かけて行く。

パパスと一緒にいるんな所を渡り歩いて来たタダオだが、立ち寄るのは小さな村や町ばかりであった為、アルカパはタダオには初めての大きな町であった。

レイコと一緒に色々な店などを覗いたりしていると何処からか小さな悲鳴みたいな声が聞こえて来たので、その声の方に向かってみると、池の中にある小島で、二人の子供が小さな動物を苛めていた。

「ほらほら、もっとちゃんと鳴いてみるよ」

『キュ〜ン……、コ〜ン』

「違っだろ、猫ならニャーンて鳴かなきゃダメだろ」

『ギャンツ〜コン、コ〜ン……』

小さな動物は怪我をしているのか抵抗も出来ずに蹲り、力無く呻き声を上げているが、それでも子供達は構わずに面白がって苛め続けている。

「アイツら……、なんちゅー事をしとるんや!!」

「あいつ達は近所でも有名な悪ガキよ」

「こらーっ！弱いものいじめはやめんかいつ!!」

「な、何だよお前は。コイツは俺達が見つけたんだ、どうしよう俺達の勝手だろ」

「そうだそうだ、邪魔するなよ。それに面白いだろ、コイツ鳴き声がへん……」

タダオはすぐさま駆け出して苛めを止めさせようとするが子供達は耳を貸さずに苛めを続けようとしていた。だが、タダオの後ろから近づいて来るレイコの姿を見つけると、勝手にオロオロとした。

「鳴き声が……何だって？」

「げえーっ！っ!! レ、レイコー!!」

「乙女に向かって「げえーっ!!」とは何よ!!」

「ばびろにあっ!!」

レイコの拳こぶしから繰り出される“星屑で革命”な拳けんを受け、いじめっ

子兄は吹き飛んだ後、頭から地面に叩き付けられた。

それはそれとして
閑話休題

「さあ、その猫さん放してやるんや」

「嫌だね」

「どうしても嫌なの？」

「ぐっ……、い……嫌だ……」

いじめっ子兄弟は猫？を放せというタダオとレイコにあくまでも嫌だと言つて譲らない。

正直、レイコが怖い事は怖いのだが男としての最後の意地が勝っている様だ。

彼等の足元には木に紐で繋がれた猫？が辛そうに蹲っている。

猫？と表記してるのはその動物の尻尾が九本に分かれているからだ。この動物…否、この魔物の名は「キラーフォックス」それも、最も獰猛で知られる「キラーフォックス・ナイン」である。

本来なら大人達がそんな恐ろしい魔物を町に入れる事を許す筈もなかったのだが本来「キラーフォックス」はこの地方と言うよりこの大陸には住んでいない魔物なので大人達もそれと気づかずいたら

しい。

「じゃあ、どうやったら放してくれるんや」

「そうだな……、じゃあ噂のレヌール城のオバケを倒したらこの猫はお前達にやるよ」

「レヌール城のオバケ？それって何や、レイコ姉ちゃん」

「此処から少し離れた所にある古いお城で、もうずっと昔から誰も居ない筈なのに夜になるとお城から灯りが漏れ出して気味の悪い笑い声なんか聞こえて来るのよ」

「そ、そつか……。とにかく、そのオバケを倒して来たら猫さんはワイらがもらうで」

「よし、約束だ。オバケ退治が出来たらこの猫はお前達の物だ」

「決まりね！タダオ、さっそく今夜出かけるわよ」

「おう！と、その前に……“ホイミ”」

タダオは辛そうにしているキラーフォックスに近づくと回復呪文ホイミを唱えてその体に付けられた傷を癒して行く。

「キユウ？……「コン」」

「もうちよつとのしんぼうやで。すぐに助けに来てやるからな」

「コン…コン、コン」

キラーフォックスはタダオの言う事が分かったのか、しきりに頷きながらその尻尾をパタパタと振っていた。

「タダオ、あんた魔法が使えたのね」

「まだホイミだけやけどな」

「とにかく、オバケ退治がすんだらその猫は私達の物になるんだからね。もし、また苛めて傷が増えてたらタダじゃ済まさないわよ」

「わ、分ったよ」

「じゃあタダオ行くわよ。ちゃんと準備しておかなきゃ」

「了解や」

Level 3「オバケ退治にレヌール城へ」その1（後書き）

（、・・・）と、言う訳でタマモ登場、それによりキラーパーンサーからキラーフオックスへと変えさせて頂きました。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その2

それからタダオとレイコは武器屋へと行き、戦力の強化を計った。タダオは新たにブーメランを、レイコには茨の鞭を買い、防具も革の鎧に革のドレスを購入。

それらはばれない様に宿屋の裏に置いてある樽の中に隠しておいた。準備は万端、後は夜になるのを待つだけなので体力を温存する為にゆっくり休んでおこうと宿屋の中に入るとパパスは帰る準備をしていた。

「戻ったか、タダオ。ダンカンの見舞いも済んだ事だしサンタローズに帰るぞ」

「え…ちょ、ちょっと待ってや父ちゃん」

「ん？どうしたタダオ」

「今から帰るんか？」

「ああ、今からなら夜になる前に帰り着けるだろうからな」

「そ、そんな…猫さんが…」

「タダオ……」

今帰ったらレヌール城のオバケ退治は出来ず、猫を助けるという約束が果たせない。二人共、どうしようかと悩んでいるとそこに助けの音が聞こえて来た。

「ちょっとパパスさん。そんなに急いで帰る事もないだろう、一日位泊って行きなよ」

「そ、そうよおじ様！私ももう少しタダオと遊びたいわ」

「ワイもレイコ姉ちゃんともう少し一緒にいたいで！」

「そ、そうか。ならば少し甘えさせてもらおうとするか」

「わーい。（何とかたすかったな、レイコねえちゃん）」

「今日は一緒に寝ましようね、タダオ。（危ない所だったわ。ママには感謝ね）」

両手を繋ぎ、飛び跳ねながら喜ぶ二人をパパスとママは微笑ましそうに見つめている。

まあ、傍から見ると仲の良い二人が一緒に居られる事を喜び合っている様にしか見えないのだから。

だからこそ……

「これで家の宿屋も将来は安泰だね。タダオ君なら良い婿になれるよ、ねえパパスさん」

「ママはそんな風にタダオの事を狙っていたのか……」

「あら、当たり前じゃないか。ほほほほほほ」

幸か不幸か、そんな大人達の会話は子供達の耳には届かなかった。

そして、大人達も眠りについた深夜、レイコは隣に寝ているタダオを起こし家から抜け出して行く。

念の為、パパスが寝ている所も覗いて見たがぐっすりとよく寝ていた。
それでも「マーサよ、私達のタダオは真直ぐに成長しているぞ」と、寝言を言った時には黙って行く事に罪悪感もあつたが猫を助ける為だと自分達に言い聞かし、隠してあつた武器と防具を身に付けてレヌール城へと歩き出した。

「見えて来たわ、あれがレヌール城よ」
「うっわ〜。うすき悪い城やなあ」

タダオとレイコの視線の先に佇むのは、嘗ては壮観な白亜の宮殿で在ったであろうレヌール城。
しかし現在はその外見に当時の面影を残すのみで、暗雲に包まれ時折雷鳴が轟く怪しげな城と化していた。

「さあ、今更逃げるだなんて言う選択肢は無いからね。覚悟を決めなさい」

「に、逃げるつもりなんてないけど、きみ悪い事には変わりあらへんで」

「グダグダ言わない。ちゃっちゃっつと進みなさい」

「へっへい」

そして二人は城の正門から入ろうとするが、巨大な上要素要所が錆びついているらしくその扉は開かない。

何処か他に入る場所が無いかと探し回る内に、城の裏側に上へと登れる鉄梯子を見つけた。

「とりあえず、入れそうな場所は此処しか無い様ね」

「やな。じゃあ、レディーファーストでレイ…バゴムツ…!!…ワイが先に登らせていただきます。いてて…」

レイコに拳骨を受けた頭を擦りながらタダオは梯子を登って行き、レイコもその後続く。

登り終えた先にはアーチ状の門らしき場所、その先には城の中へと招き入れる様に扉が開いていた。

「あそこから入れるわね、行くわよタダオ」

「なっんか、嫌なよかんがするんやけどな」

周りを警戒しながら進み、扉から城の中に入ろうとした瞬間、突如門らしき場所のアーチ状の部分から鉄格子が降りて来て二人は閉じ込められてしまった。

「…嫌なよかんはしとつたんや」

「い、今更言つても仕方ないでしょ。こうなつたら先に進むしかないわ」

「せやな。城の中ならほかに出口があるかもしれん。オバケを倒してからさがそうな」

「その意気よ」

半開きの扉を開いて中に入ると其処には幾つかの棺桶が並び、おどろおどろしい雰囲気の中、二人は身を寄せ合いながら進んで行く。

そして目の前に下の階に降りる階段が見えて来た時、タダオはすぐ隣に居た筈のレイコの気配が消えている事に気が付いた。

「あ、あれ？レ、レイコ姉ちゃん？どこや？い、いたずらは無しやで……。ひょっとしてオバケにさらわれたんかっ！？」

レイコが傍に居ない！オバケに攫われた。

この図式が頭を過ぎった時、タダオはさっきまでの怯えは消え去り、レイコを探し出す為に全力で駆け出し、階段を駆け下りて行く。

下の階に降りると石像が並ぶ先に明かりが漏れて来る扉を見つけ、再び駆け出す。

すると石像の中の一体が突如動き出し、タダオの行く手を遮る様に通路を塞いだ。

「じゃまやーっ！っ！ どかんかーっ！っ！いつ！っ！」

タダオの攻撃

会心の一撃

動く石像をやっつけた。

レイコを心配するが故での火事場の馬鹿力か、強敵である筈の動く石像を一撃で倒した上、それに気付かずにいるタダオだった。

扉を開くと、其処は城の屋上の一角で庭園みたいな場所に墓が二つあった。

タダオはその墓に近づいてみると墓石には「タダオのはか」と書かれており、もう一つの墓石を見ると「レイコのはか」と書かれていた。

「レイコのはか」って……、たいへんやーっ！っ！レ、レイコ姉ちゃーん！っ！」

タダオは大慌てで墓石を力一杯に押すと墓石はゆっくりとずれて行き、中からレイコが出て来た。

「レイコ姉ちゃん、ぶじやったんやな。良かったー!!」

安心したタダオは泣きながらレイコに抱き付いたが、レイコは何も言わずにその手をそっと離させるとゆっくりと立ち上がる。

「レ、レイコ姉ちゃん？」

その体から湧きあがる怪しげな雰囲気になんか少し怯えながらもタダオはレイコの名を呼んでみた。

「ふ、ふふふ……ふふふふふ……あははは……」

「ど、どうしたんやレイコ姉ちゃん。ちょっと怖いで……」

「あははははははは、あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ……!!」

レイコの笑い声はその黒いオーラと共に激しさを増し、そして……

「私を墓の中に押し込むなんていい度胸してるじゃない、あんの腐れ悪霊共！！……………、この美神令子が極楽に逝かしてやるわっ！！」

遂にレイコの怒りは限界を超えた。

「美神って誰やー！ーっ！？」

ついでにタダオの恐怖も頂点に達した。

「冒険の書に記録します」

《次回予告》

猫さんを助ける為にオバケ退治にやって来たレヌール城。でも此処には猫さんよりもっと困ってる人達が居たんや。待っててな王様たち、ワイらが絶対に助けたるからな。

そうや、猫さんも王様たちも、ワイとレイコ姉ちゃんが助けるんや。

…………でもな、もう一度聞くでレイコ姉ちゃん。

次回Level4「グレートシスターGSレイコ極楽大作戦!!」

美神って誰やーっ!??

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」その2（後書き）

（、・・・）ありのまま、全てを告白します。美神をピアノカ役にしたのはこのネタをやりたいかつたからです。でもまあ、それ程ハズレ役って訳でも無いと思うんですよ、美神もあれで結構面倒見はいい方ですし。とにかく此処の美神は素直レイコになった美神って事で。

…… 次回のタイトルもあくまでもネタで主役はタダオです…… の筈。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その1

レイコを助け出した後、タダオ達は再び城の中へと進んで行く。
下の階に降りると其処は嘗ては図書室だったのか、本棚が乱立し、
その内幾つかの本棚は倒れ伏している部屋だった。

「……もうみんなボロボロで読めないわね」
「そうやな、もったいないわ……。あれ？」
「どうしたの、タダオ？」
「いや、だれかそこにおったような気が」
「もしかして、噂のオバケ？」

そう言い、少し怯えながら辺りを窺っていると淡い光に包まれた一
人の女性の姿を見つけた。

「うわっ！」
「きゃっ！」

突然の事に驚いた二人だが、その女性の悲しそうな顔を見ると不思議と恐ろしさは感じなかった。
女性は二人の顔を見つめた後、ゆっくりと歩き出し倒れていた本棚の中へと消えて行った。

「レイコ姉ちゃん」

「ええ、あの本棚の下に何かありそうね」

Level 4 「グレートシスターGSレイコ極楽大作戦!!」

「「よいしょ、よいしょ」」

二人は力を合わせて倒れていた本棚を押すとその下から隠れていた階段を見つけ、下の階へと降りて行く。

少し進んだ場所に立派な扉があるので中へと入ってみると其処には天蓋付きのベットがあり、此処が嘗ては王と王妃の寝室であった事が分かる。

「ここは王様達の寝室だったのね」

「もうボロボロやけどふかふかで気持ちいいベットやったんやろな」

『そうです。王族としての激務が終わった後、此処で王である夫と過ごす時間は私達にとって掛け替えのない穏やかな時でした』

二人が部屋の中を見回していると、何処からともなく女性の声が聞こえて来て、その方向に目を向けるとソファーにさっきの女性が座っていた。

「あ、貴女はひょっとして……お、王妃様ですか？」

『はい、私がレヌール王妃、アリナです』

「ちゅーことは、王妃さまがうわさのオバケなんか？」

「そんな訳ないでしょー!!」

「ふぎゃんっ!!」

レイコに拳骨を受けたタダオが頭を擦っているとアリナはゆっくりと語り出す。

『私とあの人との間には何時まで経っても子供が出来ませんでした。そして、何時しか私は何処から流れて来た謎の病に倒れ、そのまま命付けました。それから後、あの人もまた同じ病にかかり死んでしまわれました。この城に尽くしてくれた家臣たちも同様に。その為、レヌール王家は途絶えこの地は隣国ラインハットに併合される事となりました』

「そうだったんですか…」

「王妃さまたち、かわいそうやな。ぐすん」

レイコとタダオはそんなアリナの話を聞きながらもその悲劇に涙を零していた。

『あなた達は優しい子供ですね、その綺麗な涙で私の悲しみも少しは癒されます。私達にもあなた達のような子供がいれば…』

「でも、王妃様達は何故幽霊のままさまよってるの？」

レイコは疑問を聞いてみた。

アリナは目を瞑りながら顔を伏せ、少し考えてみたのか徐に顔を上げながらレイコ達に答える。

『私達の体はこの城に葬られ、安らかな眠りの中に居ました。しかし、ある日突然その眠りは遮られました。何者かがこの城を牛耳り、私達の魂を呼び起こしたのです。その日から私の魂はこの城を彷徨い続け、同じ様に彷徨っているであろう王の魂とはその何者かの邪魔によってすれ違い続けているのです』

「酷い……」

「安心してや、ワイらはそのオバケを退治しに来たんや。王妃さま達も助けてやるからな!!」

「そうね、タダオと私でそんな奴コテンパンにしてやるわ」

「「えいえいおー!!」」

アリナのそんな二人を見つめる瞳には涙が浮かんでいた。

『ありがとう二人共、あなた達は本当に勇気がある子供ですね。あなた達に神の御加護がありますように』

そう言っただけで送り出してくれたアリナを残して二人は再び城の中を捜し始めたが、その間も廃墟になった城に住み着いた魔物達が襲ってくる。

大蛇の骨が邪悪な波動を受け、仮初の命で動き続ける「スカルサーペント」

まるで蛇の様に怪しげな炎の様な幽体の「ナイトウィプス」
長い舌を持つ見た目その物の「ゴースト」
捨て置かれた蝋燭に邪霊が取り憑いた「おばけキャンドル」

次々と襲い掛かってくる魔物達だが、幼いながらも幾度もの実戦でレベルアップを重ねているタダオ、そんな彼に負けじと闘うレイコの前に魔物達も倒されて行った。

歩き続ける二人の前にアリナの時の様な淡い光の中に一人の男性の姿が浮かび上がって来た。

立派な服装に頭に乗っている王冠から、彼が王妃のアリナが言っていた王様だと言う事が見てとれる。

「すみません、あなたが王様ですか？」

『ん？おお、これは可愛らしいお客様達だ。……それにしても私の様な幽霊を目の前にして怖くないのかい？』

「全然、ねえタダオ」

「うん、王妃さまと同じや。ぜんぜん怖くないで」

『な、なんと、お前達は王妃に……アリナに会ったのかい？』

「ええ、王様の事も心配してたわ」

王妃の霊とも出会い、同じ様に彷徨っている事を伝えるとレヌール王は悲しい顔をして涙ぐんでいた。

「安心してや王さま、ワイとレイコ姉ちゃんが悪いオバケをたおして王さまたちを助けたるから。王妃さまともそう約束したんや」

「そうよ、大船に乗った気持ちで任せておいて!!」

『あ、ありがとう、勇氣ある子供達よ。お礼と言っては何だが君達の現在のレベルを調べてあげよう』

レヌール王はそう言うのとタダオとレイコの頭の上に手をやり、何か呪文の様な言葉を呟くとその手に灯った光が二人の体を包んだ。

『ふむ、坊やのレベルは年齢からみても結構高いな』

「王さまは神父さまやないのにそんな事がわかるんか？」

「こら！分かるんですかでしょう」

『はっはっはっ、構わぬよ。僕も神父達と同様に精霊の声を聞く修行はしておるからの、王座に着く者の嗜みと言う物じゃよ。坊やのレベルなら“バギ”が使えるだろう』

「バギ？バギってあの手から風がビューンって飛んでいくヤツか？
やったー」

レヌール王に調べてもらい、“バギ”が使えると知ったタダオは喜んで走り回るが、そんなタダオを見て面白くないのがレイコである。

「王様、私は？私は何も呪文は使えないんですか？」

『落ち付きなさい、君もレベルアップしているからね。君は“メラ”と“マヌーサ”が使える様だ』

「メラとマヌーサ？」

『メラは炎を飛ばす呪文、マヌーサは霧の中に幻覚を見せる呪文だ』
「炎を飛ばす？……いいわね、ソレ。今の私に丁度いい呪文だわ」

レイコはちよつと危ない眼をして「くつくつくつ」と嗤う。

そんなレイコを見てレヌール王は後頭部に大きめの汗を流し、タダオは涙目で怯え、王の体にしがみ付いていた。

『あ、あの娘は何があつたのかね？』

「オバケにさらわれて、お墓の中にとじこめられたんや」

『な、なるほどな……』

「さあ、タダオ。先を急ぐわよ」

「ラジャりました！！」

先を急ぐと言うレイコの言葉にタダオはテンパっていたのか、良く分からない返事を返す。

振り返ったレイコの目が一瞬赤く光ってた様に見えたのだから仕方ないであろう。

Level 4「GSレイコ極楽大作戦!!」その1（後書き）

（、・・・）ここでまた設定変更、レヌール王が魔物退治を依頼するのではなくタダ才達が自分達から率先して退治に行きます。呪文習得も王の助言で使えるようになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139y/>

ドラゴンクエスト?～紡がれし三つの刻（とき）～

2011年11月20日18時48分発行